

摩天楼の迷宮は霧の中か藪の中か

<私のニューヨーク物語①>

益々グローバル化が加速する現代社会です。教育の世界にも、日本国外で日本人の教育を主とする教育機関が存在するのはご存じでしょうか。いわゆる「在外教育施設」と呼ばれているものです。

その名の通り、海外にある、海外に在留する日本人の子どものために、日本国内の教育に準じた教育を実施するために設置された教育施設です。

国（文部科学省）の施策によって、そういった教育施設の教職員等として、2～4年間、日本国内の現役やシニアの教職員を海外に派遣する制度があります。私は、その派遣要員として、平成15(2003)年からの4年間、ニューヨークに赴任し、「ニューヨーク補習授業校」という在外教育施設で管理職（赴任当時37歳で、日本では『教諭』でしたが、現地では職務上『教頭』という職名）として勤務しました。

ここで、在外教育施設について、もう少し説明します。在外教育施設は、大きく分けて（1）日本人学校、（2）補習授業校、（3）私立在外教育施設の3つに分かれます。

（1）日本人学校

その名の通り、国内の教育と同等の教育を行うことを目的とする全日制の教育施設です。

在籍する子どもたちは、主に、その国に駐在する企業や政府機関等で働く家庭のお子さんが中心です。管理職等も含めた教員のほとんどは、日本から派遣された現職またはシニアの教職員です。日本国内と同じ教科書を使用し、国内の小中高校と同等の教育課程を有する旨の認定を受けています。単に学校が海外にあるというだけで、基本的には日本の学校と同じです。

ただし、日本政府(文部科学省)から多大な人・モノ・金の支援を受けてはいますが、一般的には、設立運営の主体は現地の日本人会等であり、それなりの授業料も徴収しているところがほとんどの、私立的な性格を有する学校と言えます。

世界で、49 カ国・1 地域に 94 校が設置されており、約 16,000 人が学んでいます。

(2) 補習授業校 (補習校、補習学校)

平日(月～金)に現地の学校や国際学校(インターナショナルスクール)等に通学している日本人の子どもに対して、土曜日や日曜日や、平日の放課後などを利用して、主として、国語や算数(数学)などの一部の教科について、日本語で授業を行う教育施設です。

規模は様々で、幼児部から高等部まで設置している全校数千人の大規模な補習授業校もあれば、わずか数名の子どもしか在籍していない学校もあります。日本人学校同様、現地の日本人会や保護者会等が設置運営主体ですが、後者のような小さな補習授業校は、保護者を指導者とする寺子屋風とか家庭教師的な学校です。

日本人学校は、管理職も担任の先生方も、日本から派遣された現職またはシニアの先生方であるのに対し、補習授業校は、義務教育課程(小中学生)の児童生徒が最低でも 100 名超在籍しないと、文部科学省からの派遣教員は手当てされません。(100 名を超えて 1 名、400 名を超えて 2 名など派遣数に規定あり)。ですから、派遣者がいる補習授業校は大規模の一部の学校に限られます。それも、管理職としての基幹要員のみです。担任の先生方は、原則、現地で採用したその国に永住・在留している日本人や保護者等が務めています。そして、一般的に、採用条件に教員免許所有の有無は問われません。

世界で、51 カ国・1 地域に 242 校が設置されており、約 21,000 人が学んでいます。

(3) 私立在外教育施設

国内の学校法人等が母体となり海外に設置した、全日制施設です。こちらも文部科学大臣から国内の小中高校と同等の課程を有する旨の認定を受けた学校ですので、それぞれの教育課程を修了した者は、日本人学校と同様、上級学校の入学資格を有します。また、日本人学校以上に高額な学費等が必要になります。

世界で4カ国6校（慶應義塾ニューヨーク校、早稲田渋谷シンガポール校、立教英国学院、帝京ロンドン学園、スイス公文学園、西大和学園カリフォルニア校）のみの設置です。

文部科学省の支援は日本人学校がメインで、補習授業校は、いわばお情け、おまけ程度の扱いであり、人的支援については、マネジメント要員数名が派遣されるのが実情です。

ですから、在外教育施設に応募する教員は、日本人学校での勤務を前提に志願する者がほとんどで、実際、毎年の派遣教員の人数も圧倒的に日本人学校への派遣が多い（全体の約9割）わけです。しかし、一部の人間は補習授業校へ派遣されるのです。

因みに、派遣は各都道府県と文部科学省の面接で選抜されますが、派遣先が日本人学校か補習授業校か、そしてどの国へか、どこの学校へかは、志望者の希望に応じることはなく、すべて文部科学省の差配です。

派遣先が補習授業校に決まった者は、その時に初めて「補習授業校って、一体何なの？」という事態になる場合が往々にあります。私もそうでした。我々学校関係者ですらそのような認識なのですから、一般の人たちの補習授業校に関する知識や認識は、過去も現在もほとんど皆無であるように思われます。

ところが、国の支援や世間一般の知名度・認知度、多少なりとも耳にしたことのある頻度は日本人学校の方が圧倒的に上にもかかわらず、前述のデータが示すように、全世界での学校数も在籍者数も、実は補習授業校の方が断然多いのです。

そんな補習授業校という未知なる世界、そして世界最大の大都市ニューヨークに向けての新たな旅立ちに、自分も含め、家族全員不安しかありませんでした。

中学校教員を退職した妻、7歳の長男、3歳の長女を帯同し、20時間超のフライトを経てジョン・F・ケネディ空港に降り立ったのは、松井秀喜がニューヨークヤンキースに入団し、バスケットボールの超スーパースター、キングことレブロン・ジェームスがNBAデビューを果たした平成15年。その4月3日のことです。

テレビや映画で、「こんな国(アメリカ)を相手に、日本はよく戦争をやったものだ」などの内容のセリフをよく耳にしたことはありますが、空港から借家に向かう迎えの車の中から見ると、縦横無尽に張り巡らされたハイウェイを、まるでおもちゃの車列のように数珠つなぎで疾走する外車の群れを見て、私も同じ思いが自然に沸き上がってきたものです。

霧雨で空がどんよりと鉛色に曇るあいにくの天気の中、車窓から遥か遠くに臨むマンハッタンの摩天楼群は霞んでいて、まるで蜃気楼のごとき幻にさえ思えました。これから進む道程は霧の中かそれとも藪の中か、と暗示しているような。

以後続く4年間、日本に帰国することなく、日本の文化、慣習、生活環境、教育事情等とは勝手が違う世界に右往左往し怒涛の日々を送りながら感じたことを、ぜひお伝えしたい。子どもたちには、国外で頑張っている子が世界中にたくさんいることを、保護者や先生方には、教育に関する新たな視点や異なる見方・感じ方で視野を広げていただくために。